化石　73，61-63，2003
Fossils
The Palaeontological Society of Japan

化石研究グループの紹介

徳島県化石同好会

小松俊文*・四宮義昭**・石田啓祐**
*熊本大学理学部・**徳島大学総合科学部

Tokushima Amateur Fossil Club

Toshifumi Komatsu*, Yoshiaki Shinomiya** and Keisuke Ishida**
* Department of Science, Kumamoto University, Kurokami 2-39-1, Kumamoto, 860-8555. ** Laboratory of Geology, Faculty of Integrated Arts and Sciences, University of Tokushima, 1-1, Minamijosanjima, Tokushima 770 - 8502

2時間ちょっと．四国がこんなに近いことが信じられなかった．京都で10時のバスに乗り，淡路島を経由して鳴門に着いたのが12時半．確かに時刻表どおり．しかし，本当に2時間そこそこで着いてしまうとは…．以前，徳島を訪ねた時は，JRで瀬戸大橋を渡り，初日は移動日で翌日からが化石採集．徳島の化石産地を訪ねるのは，それなりの準備と覚悟が必要だった．ところが，今では京都・大阪在住の化石愛好家にとって，車さえあれば十分日帰りの地域になっている．

徳島県には白亜系の地層が広く分布する．勝浦盆地周辺にはアンモナイトや二枚貝，植物化石などを豊富に産出する主に白亜系下部の堆積物が広がり（沼野・中野，1964；Nakai and Matsumoto，1968；小川，1971；前田他，1987；松川・江藤，1987；石田・橋本，1991；石田ほか，1992），瀬戸内周辺には，白亜系上部の和泉層群が露出する．また，古生代や中生代三畳紀，ジュラ紀の化石を含む地層もあり，化石の種類や産出量は申し分ない．多くの化石愛好家が育つのはあたり前の環境である．今回，著者の一人である小松は勝浦盆地の傍示（ぼうじ）層・藤川層の化石産地を案内してもらう目的で，徳島化石同好会の方々にお会いした．なお，この記事はその時の体験にもとづいて記されている．

白亜系傍示層の化石産地

比較的アクセスの簡単な傍示層の化石産地を紹介する（図１）．場所は勝浦郡上勝町の正木ダムの東岸にあたる．ダム湖の湖南線から柳谷方面に向かう道を200ｍほど入った山腹斜面の杉林に露頭がある．この付近には白亜系下部の傍示層の砂岩が分布し，サンカクガイなどの二枚貝を産することで有名である（図2）．砂岩は硬く割るのに苦労するが，層理面を上手く剥がした時に現われるサンカクガイの密集層は，まさにトリゴニア砂岩の名に恥じない．ここではサンカクガイの*Nipponitrigonia*が多く，*Pterotrigonia*や小型の二枚貝，ベレムナイトなども産出する（図3）．

ここの化石は，ほとんどが殻の溶けた印象化石として産出し，初めて見る人には本来の形をイメージすることが難しい．特にサンカクガイの蝶番の部分は，形が複雑なため，シリコンゴムなどの印象剤を使って型標本を作製することをお薦めする．印象剤には様々な種類があるが，GC 社のエクザファイン（パテタイプ）は使い勝手が良く，変形も少ないのでお薦めである．歯科医に尋ねれば卸し業者を紹介してもらえるだろう．上手く型がとれれば，美しい肋をもったサンカクガイが層理面を所狭しと埋める見事な標本が現われる．

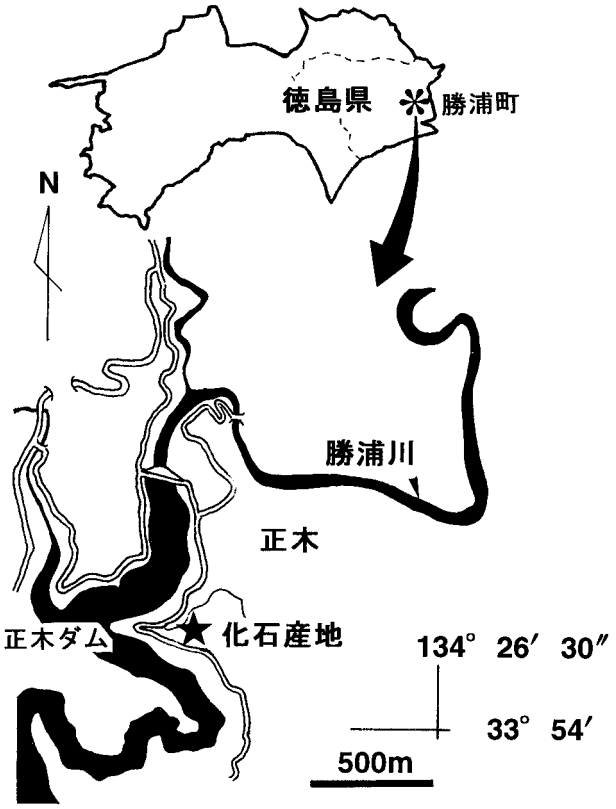

図1．傍示層の化石産地．

図２．白亜系傍示層産のサンカクガイ．スケールは1cm.

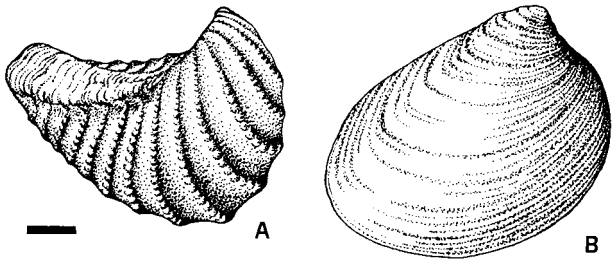

図３．A: *Pterotrigonia pocilliformis* (Yokoyama).
B: *Nipponitrigonia sakamotoensis* (Yehara)．スケールは1cm.

徳島県化石同好会

徳島県化石同好会は，会員10名ほどからなる化石同好会で，徳島県勝浦町を中心に活動しており，化石産地などで知り合った化石愛好家が，お互いの情報を交換し親睦を深める目的で1991年に結成された．発足当初は石を割って化石を探し出す楽しみだけで集まったが，地質や化石についてある程度の専門的な知識をもつ必要性を感じ，地元の大学の先生を頼って勉強会や野外巡検などを行なっている．会員が携帯していた地形図に記された化石産地やルートマップからは，谷筋一本一本をつめた様子や地層の分布を考えながら化石の採集を行なっているのが伺えた．最近ではこのような努力が実を結び，羽ノ浦（はのうら）層の下部や藤川層でアンモナイトの密集層を見つけ，勝浦町ではシルル紀のサンゴ化石などを発見している．

同好会が重点を置くもう一つの活動は，化石を通じた勝浦地域の人々との交流である．毎年，夏休みには勝浦町教育委員会の協力を得て「化石展」を企画している．化石展は今年で９回目となり，勝浦町の夏の行事としてしっかり定着している．化石展では同好会の活動成果を地元の人に見てもらうと共に，私有地内の化石産地の開放や採集活動への理解と協力をもとめる場でもある．こうした地元への働きかけは，近年になって実をむすび，恐竜の歯の産出層準の解明などにつながった（両角ほか, 1995）．また，これを契機として地元の方が中心となり「勝浦化石研究会」が結成され，教育委員会と共に化石産地の保護や案内といった活動を行なうまでになっている．

化石標本の扱いについて

調査を終えた日の夕方に，ある会員の方の自宅に御邪魔させてもらい，化石を見せてもらった．山積みにされた標本箱がいくつかの部屋の一角を占め，その中にはクリーニングされた化石がきちんと並んでいる．全ての化石にラベルが付けられ，誰にでも分かるように産地が明示されている（間違いなく私の標本よりも手入れが行き届いている）．化石は全て勝浦産の標本で，その中には未報告のアンモナイトや二枚貝も含まれていた．私は同好会の方々が標本をどのように管理しているのか尋ねた．すると採集した標本は，主に徳島県立博物館に保管され，自宅には全く化石を置いていない方もいるらしい．博物館を訪ねた事はないが，おそらく，採集者が納得のいくかたちで管理・利用されているのだろう．自宅で保管されている化石であっても貴重な標本は，徳島大学や鳴門教育大学の教官に報告しているとのことだった．同好会の方が博物館や大学の研究者と良好な関係を保っている事は，話ぶりからも容易に理解できた．

研究者と同好会の会員が共同で調査を行なった成果として，例えば羽ノ浦地域の白亜系層序の調査（石田ほか, 1996）があり，特定層準からの化石の発見情報の提供や，化石の再発見のために会員が協力した．その時の研究者と同好会員の成果は，「羽ノ浦町誌　自然環境編」として出版されており，地質・層序の執筆と古生物図集の解説は大学教官が担当し，発見した化石標本のクリーニングと写真撮影は同好会員が担当している．なお，章末には執筆委員（本文の執筆と文章全体の統括），執筆協力者（古生物図集の解説），資料提供者（化石標本と写真の提供）として，その担当者名が明示されている（羽ノ浦町誌編纂委員会編, 1996）．

帰り際，研究に必要な標本を持ち帰ることを薦められたが，すぐには仕事ができないと考え遠慮させてもらった．アマチュアと研究者の間で標本をめぐるトラブルはしばしば生じている．その多くは研究者が標本を借りたまま研究を行なっていない場合が多い．アマチュアでも論文を読んでいる方は，自分が提供した標本の価値を把握しており，未記載の化石であれば論文になることを知っている．しかし，研究者側は単に比較標本として預かったり，今後，多くのサンプルが得られたら，研究するつもりでいるケースが多い．また，たとえ論文になっても，記載された標本が大学や博物館の所蔵となり，採集者の手元に戻らない事を

知らされていない場合もある．御互いの意思の疎通が図られず，安易な標本の貸し借りによって，これまでの良好な関係を壊すのは，あまりにも残念である．標本の貸し借りは，御互いが慎重過ぎるぐらいで丁度良いだろう（とは言ったものの，やっぱりあの時のアンモナイトは預かっておけばよかったと思ったりするのは，この道に係わる人間の性（さが）なのだろうか…）．

○連絡先　〒770-0864
徳島市大和町１丁目6-20
徳島県化石同好会・代表　四宮義明
Tel.　088-657-4757

○ 同好会の活動

・ 年間約4回の野外観察会と勉強会.
・ 毎年夏休みに行なう勝浦町図書館での「化石展」の開催. また，採集された化石や展示された物の一部は，図書館内の郷土資料室に常設展示してあり，何時でも見学可能である.
・ 同好会会員間の情報紙として不定期ではあるが「化石同好会情報」を発行 (現在までに24号発行). また，会員のみに配布している手製の「化石写真集」を第７巻，第11集を作成している.
・ 今後の活動のテーマの一つとして，勝浦地域から産出した化石を整理し，記載論文・解説などを付けて，勝浦町図書館の郷土資料室に展示することを計画している.
・ これまでに幾つかの他府県の化石同好会とは交流しているが，今後はより多くの団体と交流することもテーマとしている.

○　入会方法

細かな入会規則は無いが，入会にはとりあえず会員の推薦が必要である.

文献

羽ノ浦町誌編纂委員会(編)，1996．羽ノ浦町誌　自然環境編　第３章　地質．159-265.

石田啓祐・橋本寿夫，1991．四国東部秩父累帯下部白亜系の放散虫群集とそのアンモナイトによる年代，徳島大学教養部紀要 (自然科学)，**25**，23-67.

石田啓祐・橋本寿夫・香西　武，1992．四国東部の下部白亜系羽ノ浦層の岩相層序と生層序ーその１．勝浦川地域の日浦ならびに月ヶ谷ルートー，徳島大学教養部紀要 (自然科学)，**26**，1-57.

石田啓祐・橋本寿夫・香西　武，1996．四国東部，下部白亜系羽ノ浦層の岩相層序と生層序ーその 2．羽ノ浦丘陵下部白亜系の再検討ー．徳島大学総合科学部　自然科学研究，**9**，23-47.

小川勇二郎，1971．徳島県勝浦地域の地質ーその層序と構造ー．地質学雑誌，**77**，617-634.

前田晴良・宮田憲一・川路芳弘，1987．徳島県勝浦地域に分布する下部白亜系藤川層の推積環境について．高知大学学術研究報告(自然科学)，**36**，93-107.

松川正樹・江藤史哉，1987．徳島県勝浦川盆地の下部白亜系の層序と堆積環境ー特に秩父帯の南北２帯の白亜系を比較してー．地質学雑誌，**93**，491-511.

両角芳郎・亀井節夫・田代正之・菊池直樹・石田啓祐・東　洋一・橋本寿夫・中尾賢一，1995．徳島県勝浦町の下部白亜系立川層から産出した恐竜化石とその産出層準．徳島県立博物館研究報告，(5)，1-9.

Nakai, I. and Matsumoto, T., 1968. On some ammonites from the Fujikawa Formation of Shikoku. *Journal of Science of the Hiroshima University, Ser. C.* **6**, 1-15.

沼野恭一郎・中野光雄，1964．勝浦川盆地の西部の下部白亜系について．広島大学地学研報，**14**，105-116.